

特設分科会「災害と学童保育」からの報告 被災した地域の現状を 共有し、共に学びあって

平野良徳

第50回全国学童保育研究集会 特設分科会 世話人 全国学童保育連絡協議会 副会長

本稿では、二〇一五年一月七日・八日、大阪府で開催された第五〇回全国学童保育研究集会で行われた特設分科会「災害と学童保育」について、当日の様子を報告します。

* * *

冒頭に世話人から、これまでの取り組みと経過をふまえて、今回の分科会では、「東日本大震災で被災した地域の報告をもとに、全国の学童保育関係者が現状と課題を共有すること」「報告をふまえて、学童保育が果たしてきた役割と私たちにできる支援とはなにかを考えあうこと」を柱に議論を進めることを提起しました。

◆報告① 岩手県気仙地区学童クラブ連絡協議会会長・阿部勝さん

阿部さんは、震災直後から学童保育が再開されるまでの経緯と概略について説明した後、「陸前高田市では、現在（二〇一五年一月）平地部のかさ上げ工事など復興事業は目に見える形では進ん

でいるが、仮設住宅にはいままなお七割以上が入居しており、被災者は不自由な暮らしを余儀なくされている」「ほとんど」の校庭に仮設住宅があることなどから、子どもたちは、十分に体を動かして遊ぶことができます、肥満が問題となっている」「子どもたちにもさまざまななかたちでPTSDが現れている。被災からの四年八月という時間は、大人と子どもとは異なる。とくに、常に親を必要としている小学生の場合、肉親を亡くした心の傷が癒えることはない」など、現状と課題を報告しました。また、参加者の質疑を受けて、「避難訓練については、さまざまな状況を想定してくり返し実施することが基本だと思う。必ず行政担当者とも相談をしながら、備えを考えることが現実的だろう」などの提言も出されました。

最後に阿部さんは、「被災時に求められる支援の自身は、時間の経過とともに変化していく」「ボランティアとして現場を訪れる人々は、『〇〇してあげよう』

ではなく、『私たちは〇〇ができます』というスタンスで関わることが必要だろう」「被災した現地の人々に『手間をかけたせいで』を基本に考えてほしい」「など、支援についての思いを述べました。

◆報告② 福島県いわき市 四倉児童クラブ指導員・猪狩利江さん

猪狩さんの勤務する四倉児童クラブは、震災の影響でいったん閉所を余儀なくされましたが、二〇一一年四月の小学校の始業式にあわせて再び開所されたそうです。その後の生活の様子について猪狩さんは、「放射能の影響により、移動生活を強いられた」「何か月も外遊びができなかった」「遊びの基本である、楽しく遊ぶこと」を取り戻すことに時間がかかった」などと報告しました。

そしてこれまでの経験をふまえて、「子どもの命を守るには、子ども自身も危険なことを想定できる力を持つことが必要だ」と思う、「子どもの言葉に寄り添う心のケアが求められる」「学童保育は

子どもと家族を支える場所であることを再確認している。現在、保護者と共に防災マニュアルをつくり、学校の引き渡し訓練に協力している。さまざまなことを想定して訓練にくり返し取り組むことが基本だと思う」「今後の課題は、支援を受けるのみならず、それらをきっかけに、交流できる関係を築いていく」と自らの思いや願いを述べました。

◆報告③ 宮城県学童保育緊急支援プロジェクト・池川尚美さん

池川さんは、宮城県学童保育緊急支援プロジェクト（以下、プロジェクト）では、指導員が安定し、学童保育本来の役割を果たせることが重要と考え、指導員の研修を柱に支援活動を行っていることを報告しました。

つぎに、プロジェクトが支援の参考にしている支援のあり方「心理社会的支援」について、公益財団法人フリン・シャパンの後藤亮氏が説明しました。これまで一般的に行われていた支援では、支援者

の思いが先行し、被災した地域に混乱や負担を与えることもありました。「心理社会的支援」とは、被災した人々がもつ「回復力」を引き出すために、被災した地域の文化的背景や個人の生活歴などを考慮して支援を進めるといいます。多くの人は身近な人の支えで回復すること。そうした支援の場として地域に学童保育があり、身近な支援者として継続的に子どもや保護者を支える指導員が存在することの意味は大きいなどのお話を聞き、学童保育の役割を再確認しました。

* * *

意見交換の際には、阪神・淡路大震災を経験した方からの発言もありました。また、「PTSDからの回復にともなう困難」「被害の内容と復興・支援の進捗との関わり」「住まいや生業を確保することの困難さ」などについても指摘がありました。最後に参加者全員で息の長い取り組みが必要であることをたしかめあい、閉会しました。